

中世の港町の構造を探る

—サウジアラビア紅海沿岸ハウラー遺跡の考古学調査(2022)—

長谷川 奏 早稲田大学・東日本国際大学客員教授
 徳永 里砂 金沢大学客員准教授
 西本 真一 日本工業大学建築学科教授
 恵多谷雅弘 東海大学情報技術センター研究員・事務長
 藤井 純夫 金沢大学特任教授

Searching for the Site Plan of the Medieval Port: Archaeological Research at al-Hawra', Red Sea Coast of Saudi Arabia (2022)

HASEGAWA, So Visiting Professor, Waseda University and Higashi Nippon International University
 TOKUNAGA, Risa Visiting Associate Professor, Kanazawa University
 NISHIMOTO, Shin-ichi Professor, Nippon Institute of Technology
 ETAYA, Masahiro Researcher and Bureau Chief, Tokai University Research and Information Center
 FUJII, Sumio Specially Appointed Professor, Kanazawa University

長谷川
奏／
徳永
里砂
ほか

1. はじめに

本報告は、これまでのサウジアラビアと日本の合同調査隊による紅海沿岸のハウラー(al-Hawra')遺跡(図

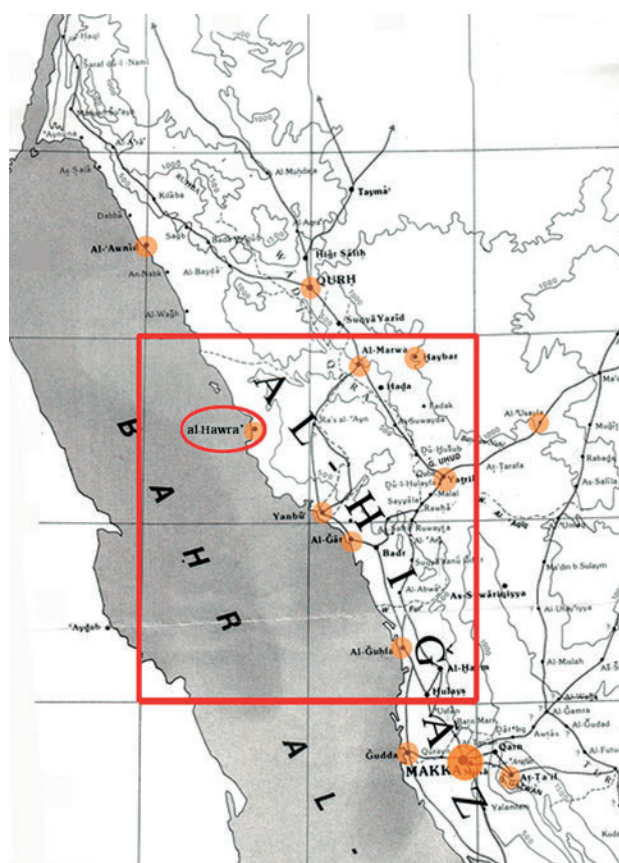


図1 研究対象地区周辺の都市分布

1)の調査成果である。コロナによる2年間の中断があったが、2022年8月には遺物整理作業を再開し、2023年2/3月には久しぶりにフィールド調査が再開される予定であるので、発掘調査報告会ではその速報も含めて報じたい。ここでは、遺構・遺物の出土状況に焦点を当てて著述する。ハウラーは、イスラム以前よりジュハイナ族の土地として知られ、9世紀以後にはエジプトからの巡礼路上の町、内陸のワデー・アルクラーの諸都市の港であった(図1)。ハウラーは12世紀半ば頃まで命脈を保ったようであるが、13世紀のヤーカートの記事からは、既にハウラーが廃墟と化していたことが窺われる。このような記述を踏まえ、私たちは、海洋から山間(砂漠)を経てヒトやモノが通ったネットワークの実態を解明するため、中世の港の発掘調査だけでなく、ハウラーの港とその後背部を通る古道との総合考察を行っていることを調査の特色としている。

2. ハウラー遺跡の発掘調査

ハウラー遺跡は、タブーク州ウムルジュの10 kmほど北に位置し、南北に2 km、東西に0.5~1.0 km程度の広がりを持つ。1980年代に在地の考古学研究者によって部分的な試掘調査が行われたが、基本的には未調査の遺跡である。遺跡は港域と集落域に分化され、このうち集落域は、東西300 m、南北150 mほどの規模を測る(写真1)。上部構造は既に失われているが、

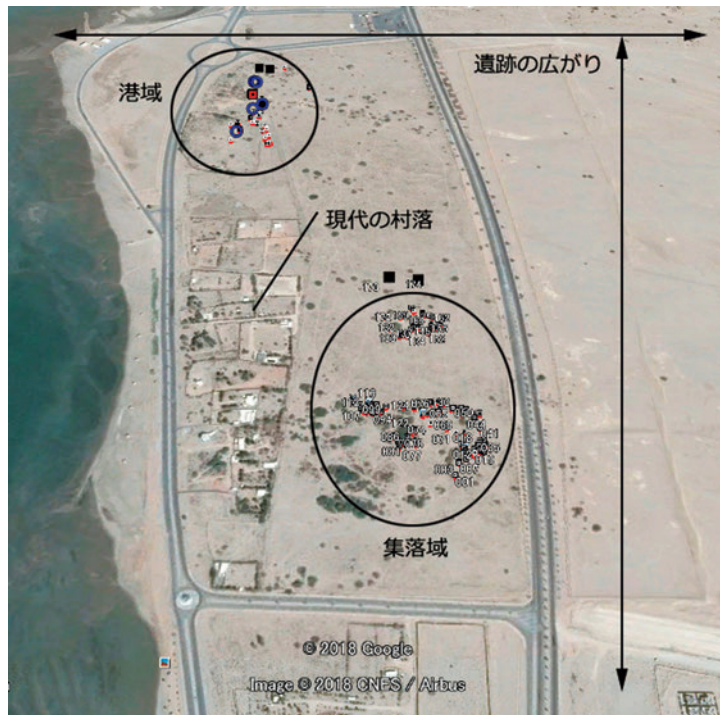


写真1 ハウラー遺跡の遺構分布(空撮)

分布する遺構の多くは、火山岩や珊瑚ブロックが用いられている。集落の一角には、1980年代の試掘調査でモスクと推測される遺構もみつかっており、クラーンの一節が記された堂々とした石製リンテルが取り上げられているため、将来的にはモスクの痕跡がみつかることが期待される。サーベイ段階での大きな調査成果は、この集落域の一角から得られたものである。ここから厚い壁厚(約1.5m)を有するほぼ方形の珊瑚造の建造物がみつき、砦としての防御的性格は明らかであった。ムカッダシーの記述には、「砦、集落、市場」の存在がみられるために、私たちは文献記述を裏付ける重要な遺構を発見した可能性がある。

調査の開始にあたっては、集落の一角に測量原点Lを設け、50m四方のグリッド設定を行い、これはさらに総計25にわたる10m四方の小グリッドに細分化された。このうち、砦は、A1a、A2a、B1a、B2aにかかる総計20の小グリッドに広がる遺構であり、2020年調査では、北側を占める8グリッドの発掘を行った(写真2)。一方、集落は、砦の北部と東部の小高い丘陵部全体に広がり、2020年調査では、D1c～A1c～A2cに広がる住居の南端の構成に関わるA1cの4グリッドから発掘が開始された(図2)。

①砦調査

砦の発掘は、表層下1m程度までの掘り下げを行ったところ、表層の砂に混じって数多くのブロック

(珊瑚・火山岩)が取り上げられたが、これは壁体の倒壊に由来していると思われた。これらを除去したところで、北壁には、ブロックを整然と積んで面取りを行っている部分もみられた(写真3)。さらに建物の内側では、小部屋の内壁かと思われる遺構部分も見始めているが、詳細の確認は次期調査に持ち越された。ブロックの取り上げに際しては、特に東側の4グリッド(A1a4、5/A2a24、25)では、数多くの石製品が取り上げられたが、これらは石製容器、ランプ、香炉等を含むものであった(写真4)。大型獣と思われる動物骨(らくだか)も多く取り上げられた。砦のプランに関しては、初見時の見通しどおりに、東壁(約34m)が西壁よりやや長い台形状を呈していたことが確実となったが、入り口部分はまだ判明しておらず、北西コーナーは破壊を受けているようであり(図3、写真5)、これらの点が次期調査で明らかになることが期待される。

②集落調査

集落の南端では、壁厚0.6～0.7m程度の壁体基礎部が地表面で散見されており、分かり易い指標となっていた。調査区の中のA1C25西端には、家屋の外壁と他家屋の間にある幅2mほどの小道が含まれている可能性がある。A1C24では、2.8×2.6mほどの規模の小部屋がみつかった。この小部屋では、床面のモルタルが破壊を免れて大部分が残存しており、部屋の中央近



写真2 発掘風景

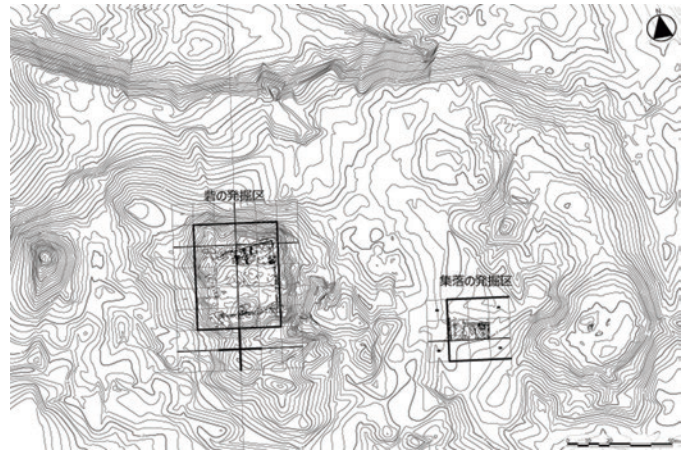


図2 ハウラー遺跡の遺構分布図



写真3 砦の北壁外面



写真4 砦における石製容器出土状況

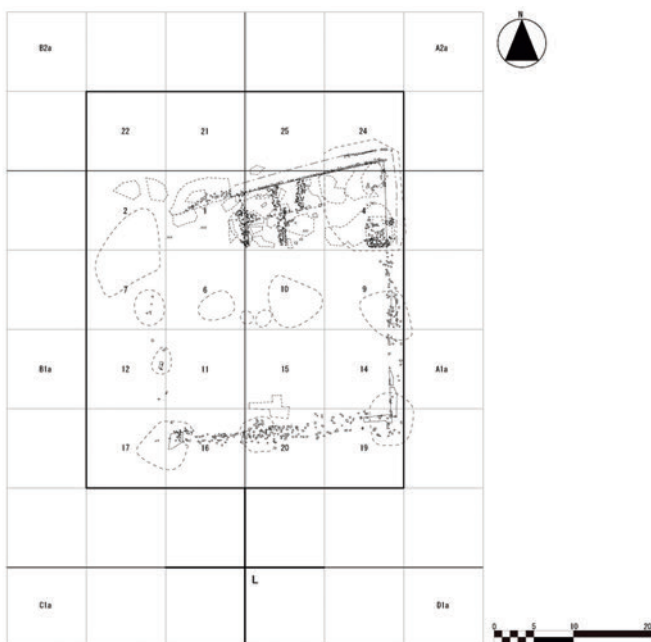


図3 砦の平面図



写真5 砦の全体像(空撮)

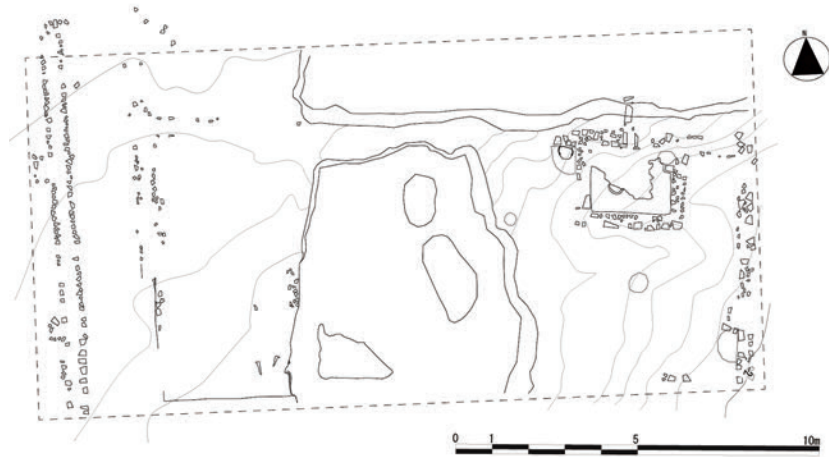


図4 集落内キッチンの平面図



写真6 集落内キッチンの遺構(空撮)

くには、土器を用いたために土面の一部が盛り上がる痕跡をもつ炉がみられた。また小部屋の外壁体には、排水溝の痕跡がみられたことから、総じて、この空間はキッチンであった可能性がある(図4、写真6)。キッチン南側の生活面(ダッカ)からは、いくつかのすり石が集中的に出土し(写真7)、また青緑釉(アルカリ釉と思われる)の完形の碗がみつかった(写真8)。

3. 後背地碑文調査

2022年夏のハウラー後背地調査では、ウムルジュの東約50~60kmの内陸部においてグラフィティ、ペトログリフと遺構を伴う遺跡の分布調査を行った。調査地は①ルワイダート地区東部(3遺跡)、②シャサース地区(6遺跡)、③トゥファイハ、ヤマーマ、ムハビー地区(5遺跡)で、遺跡は主にハッラ(溶岩原)上



写真7 集落におけるすり石出土状況



写真8 集落における施釉陶器土状況



写真9 トッフファイハの小山のグラフィティ



写真10 環状列石付きケルン(トッフファイハ山頂)



写真11 トッフファイハ山麓のペトログリフ

に分布する。いずれの地区においても確認された遺構は、主に環状列石付きケルンおよびそれに付随する構築物の遺構や石塚で、いずれも西アラビア各地に類例は多い。ここからおよそ 200 km 程度東のハッラト・ハイバルに多数分布する同様のケルンは、近年の研究により前 3 千年紀中頃から末にかけて建造された墳墓であることが明らかになっている (Dalton et al. 2021)。

一方、グラフィティとペトログリフは、上記のうち 6 遺跡にて発見された。グラフィティについては、計 10 点(古代北アラビア文字碑文 8 点、初期イスラーム時代アラビア文字碑文 2 点)の新資料を登録した。今期最大の資料集中地は③のトッフファイハにある小山で、ここでは稚拙な書体の古代北アラビア文字碑文 4 点、初期イスラーム時代アラビア文字碑文 1 点に加え、先史から近代に至る様々な時代のペトログリフが発見された(写真 9)。その西南西 200 m の山上には環状列石付きケルンがあり(写真 10)、小山や山麓のペトログリフ(写真 11)との関連が示唆される。また、ムハ



写真 12 ムハビーの初期イスラーム時代のアラビア文字碑文

ビーでは 2019 年春の調査で発見した碑文と同一人物による未完成の初期イスラーム時代のアラビア文字碑文が発見された(写真 12)。

4. おわりに

ハウラー遺跡の中世の港の発掘調査は、2023 年 2/3 月には、サウジアラビア政府の側の意向を受けて、調査域を大きく拡大する予定である。さらに港域や集落外縁の砂漠域の物理探査も行われることになっている。また後背地碑文調査も、碑文学と画像情報学のタイアップの調査がいっそう進展していく予定である。ハウラー遺跡をめぐるヒト・モノ・情報の動きに関する新たな所見が得られることが期待され、この点を発掘報告会で速報として報じることができれば幸いである。

謝辞

本稿における遺構図面の作成は、日本工業大学の岡崎伸哉氏の協力によるものである。

参考文献

・ Dalton, M., J. McMahon, M. A. Kennedy, R. Repper, S. E. Al Shila-

- li, Y. AlBalawi, D. D. Boyer and H. Thomas 2021 The Middle Holocene 'funerary avenues' of north-west Arabia. *The Holocene* 32(3): 183-199. <https://doi.org/10.1177/09596836211060497>
- ・ al-Ghabbân, Ali Ibrâhîm 2011 *Les deux routes syrienne et égyptienne de pèlerinage au nord-ouest de l'Arabie Saoudite*, Le Caire.
- ・ Hasegawa, S. and R. Tokunaga 2018 Preliminary report of the first season of the Saudi-Japanese archaeological mission at al-Hawra', Umluj and its Hinterland: March 2018. *Archaeological Research at al-Hawra': Medieval Port Site on the Red Sea Coast of Saudi Arabia* 1, Tokyo: Saudi-Japanese Archaeological Mission at al-Hawra' Research Office.
- ・ Hasegawa, S., R. Tokunaga, S. Nishimoto and A. Alorini 2020 A new perspective on the site plan of al-Hawra', a medieval port on Saudi Arabia's Red Sea coast. *The IASA Bulletin* 25: 17-19.
- ・ Hasegawa, S., R. Tokunaga, A. Alorini and S. Fujii 2021 Survey of al-Hawra' 2020: Uncovering the structure of a medieval port city on the Red Sea coast. *The IASA Bulletin* 26: 26-28.
- ・ al-Idrisî, *Kitâb nuzhat al-mushtâq fî ikhtirâq al-âfâq*, Cairo, 1990.
- ・ al-Muqaddasî, *Aḥsan al-taqâsim fî ma'rifat al-aqâlim*, Damascus, 1963.
- ・ Yâqût, *Mu'jam al-buldân*, Beirut, vol.2, 2010.
- ・ 恵多谷雅弘・中野良志・長谷川奏・徳永里砂・A. アルオライニー 2019「WorldView-2 データで発見したサウジアラビア紅海沿岸の中世の港域「SJ06」について」『日本リモートセンシング学会誌』第 30 巻第 5 号 405-413 頁。
- ・ 長谷川奏・徳永里砂・西本真一・恵多谷雅弘・藤井純夫 2021「サウジアラビア紅海沿岸ハウラー遺跡の考古学調査(2020)」『第 28 回西アジア発掘調査報告会報告集』101-104 頁 日本西アジア考古学会。